

「直腸肛門の外科」

名古屋大学教授 高 木 弘 編

京都大学教授

戸 部 隆 吉

このたび、名古屋大学第2外科高木弘教授が「直腸肛門の外科」を医学書院から上梓された。内容は1) 手術と問題点、2) 直腸癌に対する補助・合併療法、3) 直腸癌術後管理と follow-up の3部構成になっており、現在、わが国の直腸・肛門外科の第一線で活躍中のトップレベルの気鋭の士26名が、16項目を執筆しておられる。その大半は直腸癌について述べられ、また手術に重点がおかれている。

直腸癌は病理組織学的には高度に分化した腺癌が多く、消化器癌の中では切除率も高く手術成績もよく、外科医が最もその本領を発揮しうる場でもある。

また、他臓器の癌では再発・転移の予後が極めて悪く、絶望的であるのに比較して、直腸癌では、肝転

移、肺転移とも孤在性、切除可能例があり、局所再発例の中にも、限局していて広範囲切除により延命効果がもたらされる例がある。

広範囲再切除、特に骨盤壁をも合併切除する骨盤内臓全摘術は、延命効果をもたらすが、出血も多く、所要手術時間が長く、術者にとっては高度の技術と忍耐を要し、外科手術手技も含め、現時点での最高難度の手術の1つである。編者の高木弘教授は、本手術の数少ないパイオニアの1人であり、序文にも自ら述べておられるように、腎移植、泌尿器外科手術手技の基礎のうえに立たれて、ご精進のうえ遂行しておられる。

外科手術の臨床の実際を重視される高木弘教授の、お人柄と哲学をそのまま反映されて、本書は、各執筆

者ともご自分の臨床経験をそのまま、丁寧にわかりやすく、实际的に述べておられる。

特に強調したい点は、文章中に重要事項を枠で囲み、注意を喚起していることであり、多忙な、時間に追われている読者は、この枠内の注意だけをまず読んでいかれても得られるところは多いであろう。

また一方、癌組織は血管に乏しく、有効な化学療法剤も少なく、化学療法の期待は薄いとされているが、その位置づけと現況および強力な殺腫瘍効果をもつ、そして将来有効性の期待されつつある放射線療法の最新の知見も述べられている。

更にまた、直腸癌の follow-up の中で、直腸癌術後の困難な合併症・排尿性機能障害の対策や、ストーマ・ケアの実際、更には局所再発の対策と手術について詳細に述べられている。

いずれの内容も日常臨床の指針となりうる实际的に有用な良書であり、研修医にはもちろんのこと、専門医も座右におかれてよい、推薦しうる著書である。

B5判 246頁 図101 写真50
原色図9 1989 定価15,450円(税込)
〒300

医学書院 刊